

コラム 82 — 世界各国の大東亜戦争に対する評価

<タイ国元首相ククリット・プラモード>

タイ国の元首相であったククリット・プラモードは、1955年12月にタイ国で最も権威のある「サイヤム・ラット」紙に、「12月8日」という題で、次のように発表しています。

「日本のおかげで、アジア諸国はすべて独立した。日本というお母さんは、難産して母体をそこなったが、生まれた子供はすくすくと育っている。今日、東南アジアの諸国民が、米・英と対等に話ができるのは、いったい誰のおかげであるのか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったためである。12月8日は、われわれにこの重大な思想をしめしてくれたお母さんが一身を賭して重大な決意をされた日である。われわれは、この日を忘れてはならない。」

<マレーシアの元外務大臣ガザリー・シャフエー>

1988(昭和63)年7月19日、赤坂プリンスホテルにおける懇親会の席上において、日本の某代議士が先の大戦について謝罪したのを受けて、マレーシアの元外務大臣ガザリー・シャフエー氏が次のように述べています。

「どうしてそういう挨拶をなさるのですか。あの大戦で日本は良くやったではありませんか。マレー人と同じ小さな身体日本人が、大きなイギリス人を追っ払ったではありませんか。その結果、マレーシアは独立できたのです。大東亜戦争なくしては、マレーシアもシンガポールも、その他の東南アジア諸国の独立も考えられないんですよ。」

<マレーシアの元上院議員ラジャー・ダト・ノンチック>

1988(昭和63)年、マレーシアの元上院議員ラジャー・ダト・ノンチック氏は、「日本人たちへ」と題して、次のように述べています。

「私たちアジアの多くの国は、日本があの大東亜戦争を戦ってくれたから独立できたのです。日本軍は、永い間、アジア各国を植民地として支配していた西欧の勢力を追い払い、とても白人には勝てないと諦めていたアジアの民族に、脅威の感動と自信を与えてくれました。永い間眠っていた“自分達の祖国を自分達の国にしよう”という心を目醒めさせてくれたのです。私たちは、マレー半島を進撃して行く日本軍に歓呼の声を上げました。敗れて逃げていく英軍を見たときに、今まで感じたことのない興奮を覚えました。しかも、マレーシアを占領した日本軍は、日本の植民地にしないで、将来のそれぞれの国の独立と発展のために、それぞれの民族の国語を普及させ、青少年の教育を行ってくれたのです。私もあの時に、マレーシアの1少年として、アジア民族の戦勝に興奮し、日本人から教育と訓練を受けた1人です。私はいまの日

本人に、アジアへの心が失われつつあるのを残念に思っています。これからもアジアは、日本を兄貴分として、共に協力しながら発展してゆかなければならないのです。ですから、今の若い日本人たちに、本当のアジアの歴史の事実を知ってもらいたいと思っています。先日、この国に来られた日本のある学校の教師は、『日本軍はマレー人を虐殺したにちがいない。その事実を調べにきたのだ』と言っていました。私は驚きました。私は、『日本軍はマレー人を1人も殺していません』と答えてやりました。日本人が殺したのは、戦闘で戦った英軍や、その英軍に協力した中国系の抗日ゲリラだけでした。そして、日本の将兵も血を流しました。どうしてこのように今の日本人は、自分達の父や兄が遺した正しい遺産を見ようとしないで、悪いことばかりしていたような先入観を持つようになってしまったのでしょうか。これは本当に残念なことです。」

<東京裁判の最高責任者マッカーサー>

東京裁判の最高責任者であったマッカーサーが、1951年5月3日に、米国上院軍事外交合同委員会において、次のように証言しています。

「日本は絹産業以外には、固有の産物はほとんど何も無いのです。彼らは綿が無い、羊毛がない、石油の産出が無い、錫が無い、ゴムが無い。その他実に多くの原料が欠如している。そしてそれら一切のものがアジアの海域には存在していたのです。もしもこれらの原料の供給を断ち切られたら、1千万から1千2百万の失業者が発生するであろうことをかれらは恐れていました。したがって、彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が、安全保障の必要に迫られてのことだったのです。」

<下線部分の原文>

Their purpose, therefore, in going to War was largely dictated by Security.

すなわち、下線部分で強調されているように、このマッカーサー自身が、大東亜戦争は日本にとって、自衛のための戦争であったということを述べているのです。

また、1950（昭和25）年10月、マッカーサーは、トルーマン大統領に対し、「東京裁判は間違いであった」とも陳述しております。

<アメリカ、コロラド大学ジョイス・C・レブラ教授>

アメリカ、コロラド大学ジョイス・C・レブラ教授は、「東南アジアの解放と日本の遺産」と題し、次のように述べております。

「日本の敗戦、それはもちろん東南アジア全域の独立運動には決定的な意味を持っていた。いまや真の独立が確固とした可能性となると同時に、西洋の植民地支配の復活も、許してはならないもう1つの可能性として、浮かび上がってきたのである。民族主義者は、日本占領期間中に日本軍により身につけた自信、軍事訓練、政治能力を

総動員して、西洋の植民地支配復帰に対抗した。そして、日本による占領下で、民族主義、独立要求はもはや引き返せないところまで進んでしまったということを、イギリス、オランダは戦後になって思い知ることになるのである。・・・中略・・・さらに日本は独立運動を力づけ、民族主義者に武器を与えた。日本軍敗走のあとには、2度と外国支配は許すまいとする自信と、その自信を裏付ける手段とが残ったのである。東南アジアの人々はいまや武器を手にし、訓練を積んでおり、政治力、組織力を身につけ、独立を求める牢固たる意志に支えられていた。」

<インドのパール判事>

これは、東京裁判の判事であったインドのパール博士の言葉であります。

「時が、熱狂と偏見をやわらげたあかつきにはまた、理性が、虚偽からその仮面を剥ぎとったあかつきには、そのときこそ、正義の女神は、その秤を平衡に保ちながら、過去の賞罰の多くに、その所を変えさせることを、要求するであろう。」

パール博士は、東京裁判で11名の判事のうち、唯一国際法学者の資格を持った判事で、同裁判の国際法上の無効性と、日本の無罪を終始主張した判事であり、裁判が終わってから、パール博士の東京裁判における立証の正当性と、国際法理論に対する見識が高く評価され、選ばれて戦勝国が作った国際連合の司法委員会の委員長に就任し、その要職を全うした人であります。

<ドイツのボン大学オットー・カロン教授>

ドイツのボン大学教授をしていたオットー・カロン氏は、大東亜戦争の敗戦後の日本について次のような讃辞を述べています。

「私は戦争に敗れた日本をいっそう尊敬する。心ある外国人は敗戦によって日本の本当のよさを知り、日本をあらためて見直した。・・・中略・・・敗戦の混乱の中で、国論を1つにまとめて、一定の方向に指導することは不可能に近い。これが世界の歴史が教えている通常の悲劇である。ところが日本の場合はどうか！ 事実は意外な姿になって現れた。全国民の思想を玉砕から降伏へと、一時にして転換せしめ、整然として世論がまとまった。このような不思議は、世界の歴史に類例はない。その不思議な力は天皇の放送であった。それを国民は整然と聞き分けた。これは厳然たる歴史の事実である。この陛下と国民とは自ら意識すると否とに関わらず、客観的にはただ誠に偉大というほかはない。『日本人よ、よくぞでかした！』と私は讃辞を贈りたい。これは日本の誇りであるとともに、人類の誇りである。これこそは、日本の美しい歴史に養われた偉大な民族性の実証であろう。」

<アメリカの外交官ジョージ・ケナン>

アメリカの外交官ジョージ・ケナンは、「日米戦争の帰結として」と題して、「中国や朝鮮半島における日本の存在を駆逐したが、結局我々は『日本が直面し、かつ担っ

てきた問題と責任を引き継ぐ』ことになった。」と戦後、述懐しており、戦争をする相手を、アメリカは間違えた旨の発言をしています。

また、マッカーサーの占領政策について、それは日本を共産主義者の乗っ取りに任せるために、日本社会の弱体化を画策している、そんな不思議な目的のためになされているとしか見えない、と批判しました。

<インドネシアのムルポト将軍>

1973年4月、マニラで開催されたASEAN諸国の安全保障会議で、韓国代表が「日本帝国主義が30年間も韓国を侵略したために、防衛体制が確立できなかった。その責任は日本にある」との演説に対し、インドネシアのムルポト将軍は次のように述べました。

「みずから戦わなかったくせに、責任を日本に押しつけるとは何事か。もしアジアに日本という国がなかったと仮定してみよ。1899年の義和団事件以来、ロシアは満州に大軍を駐留させ、韓国をねらっていた。韓国が戦わないから日本が戦った。これが日露戦争だった。韓国は日本が負けると思って、裏ではロシアとつながっていた。もし日本が戦わなかったら、韓国はロシア領となっていたことは間違いない。ロシア領となったのは韓国ばかりではない。もし日本がなかったら、中国の北半分はロシアが支配し、揚子江以南はイギリス・フランスが支配しただろう。・・・中華を誇る清国がふがいなく負けたから、日本が大東亜戦争を戦わざるを得なくなった。責任は中国にある。そもそもアジアで戦ったのは日本だけではないか！もし日本という国がなかったら、アジアは半永久的に、欧米植民地勢力の支配下に、置かれていたはずである」

<オランダ・アムステルダム市長>

1991年、オランダ・アムステルダム市長は、日本の傷痍軍人会代表団が、オランダを訪問した際に、市長主催の親善パーティで、次のような歓迎の挨拶を述べました。「あなた方日本は、先の大戦で負けて、私どもオランダは勝ったのに、大敗しました。今、日本は世界1、2位を争う経済大国になりました。私たちオランダは、その間屈辱の連続でした。すなわち、勝ったはずなのに、貧乏国になりました。戦前は、アジアに本国の36倍もの面積の植民地インドネシアがあり、石油等の資源産物で本国は栄耀栄華を極めていました。今のオランダは、日本の九州と同じ広さの本国だけになりました。あなた方日本は、アジア各地で侵略戦争を起こして申し訳ない、諸民族に大変迷惑をかけたと自分を蔑み、ペコペコ謝罪していますが、これは間違いです。あなた方こそ、自ら血を流して東亜民族を解放し、救い出すという人類最高の良いことをしたのです。なぜなら、あなたの国の人々は、過去の歴史の真実を目隠しされて、今次大戦の目先のことのみ取り上げ、或は洗脳されて悪いことをしたと、自分で悪者になっているが、ここで歴史を振り返って、真相を見つめる必要があるでしょう。本当は私たち白人が悪いのです。100年も200年も前から、競って武力で東亜民族を征

服し、自分の領土として勢力化に置きました。植民地や属領にされて、永い間奴隷的に酷使されていた東亜諸民族を解放し、共に繁栄しようと、遠大にして崇高な理想を掲げて、大東亜共栄圏という旗印で立ち上がったのが、貴国日本だったはずでしょう。本当に悪いのは、侵略して、権力を振るっていた西欧人のほうです。日本は敗戦したが、その東亜の解放は実現しました。すなわち、日本軍は戦勝国のすべてを、東亜から追放しました。その結果、アジア諸民族は各々独立を達成しました。日本の功績は偉大です。血を流して戦ったあなた方こそ、最高の功労者です。自分を蔑むのを止めて、堂々と胸を張って、その誇りを取り戻すべきです」と、参加者全員、思いがけない市長の発言に感動したそうです。